

健康文化・連載

わが闘病記（その2）

岡島 俊三

昭和14年6月26日発病、家にあつて絶対安静を続け、幸いにして平熱の日が続くようになり、長い汽車での旅行に多少不安はあつたが、8月16日、兄に伴われて滋賀県近江八幡町の近江サナトリウムに入院の日を迎えた。

サナトリウムは東海道線近江八幡駅から北方約3キロメートル、鶴翼山という山の麓にあつて、蒲生平野を見下ろす絶好の場所にあつた。山の裏側は長命寺があり、琵琶湖である。

サナトリウムは瀟洒な2階建ての洋風の本館と、衛星のようにその周囲に点在する五つの翼をもつ希望館、コッテイジ風の栄光館、信愛館、平和観、新生館などからなっている。

兄とは知り合いであつた栗本院長、田原婦長に迎えられ、簡単な診察を受けて、新生館の2階の2人部屋に落ち着くことになった。

部屋には、大阪の神山さんという30歳前後の方が居られて同室となる。部屋に入って、ベッドが大きくてベッド面が高いのに驚く。米国製で2段の踏台を使って上がったり降りたりするのである。うっかり落ちたら大変である。新生館というのは最も新しい建物で、2階建てで、南側の窓が三角型に突出したユニークな建物である。窓には網戸がはめられていて、硝子窓を開けても蚊の侵入を防ぐ事が出来る。始めて見る設備で感心した。

結核治療の三つの条件、安静、栄養、新鮮な空気のうち、新鮮な空気を取り入れるために、雨でも降らない限り硝子窓は開放されていた。冬になって雪の降るような厳寒の時期でも守られていた。体の方は冷えないように湯タンポを幾つも入れはしたが。

長途の汽車の旅をしたが、幸いにして発熱などの異常もおこらず、取りあえず絶対安静の生活が始まった。

ここで、近江サナトリウムの創始者、W. メレル・ヴォーリーズ氏を紹介しよう。1880年米国カンザス州に生まれ、コロラド大学で建築を専攻。建築家として身を立てることを夢みた。大学在学中キリスト教に目覚め、一生神のため、世のため身を捧げる決心をした。大学卒業の時、日本の近江八幡の商業学校で

英語教師を求めていることを知り、そこは英語の先生が短期間で逃げ帰るきびしい所であるとの話であったが、即座に自分の行くべき場所と決めて、夢を実行に移した。1905年、風習などについても何の知識もないまま日本に向かい、近江八幡の地を初めて踏んだ。時に24歳であった。

学校で英語を教えたが、聖書のかかげる高い理想を求めて人々が多く集まるようになり、生徒たちがキリスト教に感化されることを恐れた一部の者の働きで、1907年3月教職を追放されることになる。すでに近江八幡を愛し、キリスト教を広めるために八幡基督青年会館を建築していた彼は、仲間と共同生活を始め、伝道資金を得るために建築設計監督業を始めた。

1918年には、近江基督教慈善教化財団を設立し、3ヶ月後に近江サナトリウムを開院した。当時日本の結核死亡率が史上最高を示すなど、そんな状況をみて、自らも病んだ経験のある彼は、アメリカの友人たちからの寄付を募り、建てたのが始まりである。

付設のチャペルもあり、患者を精神面から支え、スタッフ一同も愛の教えのもと一致団結して健康づくりに献身するという理想のもとに建設された。ここでは患者のことを病客と呼んでいる。

いったん入院すれば最も早くても3ヶ月、長い人は3年、5年以上もいる。それだけに病客も職員も全く隔てのない兄弟姉妹「大きな家族」ということを目指して運営されていた。

彼の事業はその後、メンソレータムの製造販売により資金を得て、幼稚園、小中学校を開くなど、キリスト教生活の徹底的実践と、一信徒としての信仰と事業の両立を可能にし、彼がアメリカでの青春時代に描いた夢は着々とその豊かな実を結ぶことになった。

彼は日本に帰化し、戦時中も日本に留まり、皇室との関係も深く、終戦後、天皇の「人間宣言」を思いつき、これを進言したり、皇室政府のマッカーサー総司令部との連結で陰で活躍したとも言われている。

昭和30年代義宮正仁親王（現常陸宮）の家庭教師として招聘され、中、高生頃の養育にも当たっている。

本職の建築では、国際キリスト教大学、大丸はじめ千を越える名建築を手がけている。

入院後の生活は絶対安静が毎日続いた。日課は、検温、食事、薬、回診、清拭等である。9月1日は、ドイツ軍のポーランド侵攻があり、同7日、英仏がドイツに宣戦を布告し、第二次大戦が始まった。日本も日支事変が膠着状態にあ

り、非常時という言葉が叫ばれ続け、物資不足がじわじわと迫りつつあった。

しかし幸いに、サナトリウムでは結核療法の必須条件である栄養摂取については充分配慮された食事が提供されていた。でも運動不足のためか食欲がなく、若くて健康的な山中さん、通称鹿ちゃん（山中鹿之助にちなんで命名）と呼ばれる看護婦さんが愛想よく運んでくれる三度の食事も半分位しか頂けなかった。

体重は172cmの長身に対して47kg程度で、これは標準より遥かに少なく痩せすぎの状態であった。体重は病状を表す一つの指標になるのだが、一向に増加はみられなかった。

体温は平常値を保っていたが、赤沈値は60（平常値は男子で10以下）程度で異常に高い値が続いた。

9月の4日、同室の神山さんは退院となり、代わりに石井重雄さんが入院して来られた。東大の理学部の講師で39歳、天文学を研究されている理学博士である。瘦身で病状はからり重い方であったが、話は好きな方で会話は弾むようになった。熱心なクリスチャンであることを知った。

天文学者と知り、いろいろの質問をするようになった。かねて疑問に思っていた天体の地球からの距離はどのように測定するのかを質問したところ、ていねいに答えてくださった。

地球に近い星に対しては、三角測量の原理で測定できるとのこと、それは理解できた。しかしこの方法で測定できる限度は100光年までの星である。宇宙には100光年を越える距離の星は無数にある。これらの星の距離はどのようにして知ることができるかの質問をした。

それには次のような方法がある。星の見かけの明るさは距離によって変化する。同じ光度の星でも遠くになれば暗く見える。星の中には星自身の発光の強さを推定できるものがあり、見かけの明るさとの比較によってその星までの距離が分かる。

もう一つの画期的な方法は、1929年米国のハッブルによって発見された法則を利用することである。すなわち遠くにある星は地球からの距離に比例する速度で地球から遠ざかっているという法則である。宇宙膨張論を支持する法則である。星が地球から遠ざかっている速度は、星のスペクトルから実測できて、したがって割合簡単に星までの距離を推定できる。

このようなことを教えられた時、これまで地球、火星、木星等の惑星が運動していることを知っていたが、その他のいわゆる恒星は無限に広い宇宙空間の定められた位置に固定されて、永久不変に輝き続けているものと思っていたのに、そのような星が運動しており、また星が誕生したり、寿命があって消滅し

たりすることを知って驚いてしまった。

また何億光年の星を観察するという事は、その星の光というのは何億年前にその星を出発して大空を旅していまやっと到着したのだと思うと、宇宙というものの時間、空間のスケールの大きさに今更ながら驚きを覚えるのであった。

宇宙は無限の空間と認識していたのが、宇宙は膨張していると聞くと何か異様な感じを受ける。

空に見える星、その数は全世界の海岸にある砂粒の数ほどもあるといわれているが、それらの星はすべて灼熱状態で、生物の存在など不可能である。地球も46億年前誕生した当時はおそらく同じような状態にあったが、次第に冷却して海が生じ、適当な温度に安定すると、どうした訳か生物が誕生した。始めは単純な生物が絶え間なく複雑な生物へと進化して、政治、経済、戦争、平和、芸術、宗教などに憂き身をやつす生物へと到達している。しかし、宇宙の広大さに比べて我々の営みがいかに微々たる些細なもの過ぎないかと思知らされる。天文学の新しい情報を知らされて天文学に非常に興味を覚えるようになった。

石井さんは大学でキリスト教関係の活動も熱心にされていたようであった。帝国大学基督教互助会から出されている『森明小選集』という本を下さったり、高倉徳太郎の『福音的基督教』という本を読むように勧められて、購入して読んだりした。

9月12、13日頃、石井さんは病状が悪化して個室に転出された。したがって同室した時期は僅かに1週間ほどに過ぎなかったかがよくしゃべり、科学に関する話題、その他あらゆる話題について謙虚な態度で親切に教えていただき印象深く感謝している。しかし病気に影響したのではないかと反省している。

さて9月になっても、厳格な絶対安静が続き、ベッドの中に寝たきりで何もすることはなく、時間だけが有り余るほどある。これまでの自分の他に、もう一人の別の自分が現れて、いろいろのことを問いかけてくる。これまで自分が信じてきたことがずいぶんおかしいところがあると指摘されて、不安に襲われたりする。しかし幸いに発熱することもなく、一応経過は順調で、赤沈値も28に下がり、9月13日に日課表をもらい、午前午後、10分間の散歩と林間静臥の許可が出た。

(長崎大学名誉教授)